

幼児の遊びに関する 四つの断章

南 館 忠 智



1 前口上

前回の「公約」どおり、遊びの問題を取り上げることに決心しました。自信があったること、では更々ありません。この一ヵ月間、どうしようか、どうしようかと迷いに迷ったあげく、エイまよよ、と決心した次第。この期に及んでいまだ成算など全くなし。カッコ悪いことおびただしい限りです。

この心細さの最大の原因は、近年加速度的にその度を増してきた筆者自身の「物事をハスに見る」傾向にあります。

それはたとえばこうです。手元に「幼児の遊び―この再検討すべきもの―」と題された小論文があります。公刊されたのが一九六九年ですから、今から六年前。その筆者は、筆者自身。そこには、①「遊び」研究の現状、②「遊び」のとらえ方―行動・特質、③「遊び」の特質、④「遊び」の意義、⑤幼児の遊び―主導的活動、⑥幼児の遊びの現実性・空想性、⑦幼児の遊びの変容、⑧幼児の遊びにおける役割と規則、⑨幼児の遊びと教育、といった節が設けられていて、全体の調子はきわめてマジメ。一種の格調高きすら感じられる(?)のです。それは、六年後の現在の筆者にはとてもできない代物。読み直すだけで、いや、この代物のことを思い返すだけで、耳の奥がムズがゆくなるのを禁じえない

のです。

そこで展開されている論旨には、正面きって反論しなければならぬ点はとくに見当たりません。それどころか、ほぼ全面的に「モットモ」それなのにどうにもついて行けない感じがするのは、

これまた確か。いらだたしい気持ちの源泉はこの小論文の「自己完結性」にあり、その取り澄ましたツラの皮をなんとしてもヒンむいてやらなくては。それほどいきり立たずとも、と一方で思いつつも結果において意地を張っているわけで、これを盛んにケンかけているのが先ほどの「物事をハスに見る」傾向にほかなりません。やや冷静に言い換えるなら、一度この辺で「概念くだき」をやり直そう、ということになるでしょうか。論旨の首尾一貫性をなり自己完結性を追い求める努力を、一時ストップして、むしろ逆に、その一応の一貫性・完結性にじっくり取り込まれない「異端者的な」ケースを精力的に探し出してみたい、それがやがては理論の再構成化に役立つだろうという次第です。

それで今回は幼児の遊びをテーマに取り上げるとはいうものの、マトマッタ見解を理路整然と並べ立てて大向こうをうならせようなどというオオソレタ考えは毛頭ありません。そうではなしに、これまで筆者の頭の中でほとんどマトモに扱ってもらえなかった、最近になってようやく少しはマシな扱いをうけ始めた、そ

んなポイントを四つほど、ほとんど脈絡なしに述べてみたいと思います。

2 子どもって？

数ヵ月前、一本のテレビ番組を作りました。幼児の好奇心をテーマに十五分ものを、という事で制作担当者と話し合っているうちに、イタズラ心がふと頭をもたげたのでした。子どもを写す（撮影する）代わりに、子どもの目に映った世界を「絵」にしてみよう。これで十五分間テッテイテキに勝負する。「講師先生」の解説は抜き。ナレーションをなくし、バックミュージックも音をグンと絞る。子どもの目に映った（視覚的）世界だけが延々と映し出される。

このアイデアは、かなり薄められた上で、とにもかくにも実施に移されることとなりました。この番組が二クルの続き物の中の一本だったという事情が、イタズラ心を（不十分ながら）満たしてくれる大きな理由になったようです。そうと決まってみると、サテ子どもの目に映った世界とはいったいどんな「世界」なのだろうか、まさに「それが問題だ」なのです。わたしたちは日ごろ気軽に、子どもの世界は独特だ、などと話しているのですが、それは具体的にはどのようなことなのでしょうか。

時間的な制約もあって煮つめた討議などできぬまま「絵」作りが始まってしまいました。思いつくまま制作担当者に伝えたポイントは、まず、子どもの目の位置が低いこと、ということはわたしたち大人に比べて見上げる視線で対象物をとらえる割合が多いこと、次に、おんぶに抱っこに取っ組み合いと、視距離よりもっと近いところで対象物をとらえる場合が少なくないこと、したがってその対象物が視野の中に大きくおおいかぶさり、しかもピンボケに映るのではなからうか、さらにまた幼児の場合、大人ならほとんど気づかずに見すごしがちな対象を敏感にキャッチし、それに独自の方法でアプローチするであろうこと、ぐらいに過ぎませんでした。

この番組が放映された後、あれはオモシロかった、と何人かの方々からオホメのこぼをいただきました。一連のシリーズの中で、あの一本が風変わりな装いをもっていたのは事実で、そのかぎりにおいて確かに「孤立効果」は認められましょう。ただし、いい出した張本人としてはお世辞に酔いしれているわけには行きません。子どもの目に映った世界がはたしてアノようなものなのかどうか、まったく自信がないのです。そもそも「目に映った」という表現自体が適切かどうか。これではどうも、子どもという存在をカメラか何かと同列にしているような感じ。子ども

のもつダイナミックで能動的な特性をいい表わすには、たとえば、子どもが「切り取った」映像的世界、などというイサマシイいまわしが必要。そうなるとなおのこと、子どもモドキをでっち上げただけではないのかと心配になるのです。

あの番組作りが生んだプラスの効果があるとするなら、子どもたちは「デフォルメされた」世界に生活しているのかもしれない、とじっくり考え直すことの必要性を再確認させてくれた点に尽きると思います。デフォルメされた世界に住んでいるのは、あるいはわたしたち大人のほうがかもしれないのです。さらにいうなら、自分たち大人と違う子どもという存在を理解することのむずかしさ、このことを浮きぼりしてくれたのだ、ということなかもしれません。

3 固定遊具再見

ブランコに滑り台とくると、これは押しも押されぬ固定遊具の代表選手。ちょっとした遊び場なら、まずは例外なしにどこでもお目にかかれるオナジミの遊具です。ところがどうしたわけか不評なることはなほだしい。しかもこの不評の強さは、幼児教育の専門家を自認する程度に正比例しているように感じられます。いわく、決まり決まった遊び方しきできず、創造性を伸ばすのにチ

ットモ役立たない。いわく、場所ばかり取って、狭い園庭をますます狭くしてしまう。いわく、怪我でもされたら大変だ、「きょうはおやすみ」のはり紙しとこう、等々。

これじゃ肩身も狭かろう、なんとか弁護を買って出よう、というのがヘソ曲がりのヘソ曲がりたる所以ゆゑん。そんなにまで悪口雑言を浴びせかけるのならサッサと取り払ったらよかろうものを、などとブツブツいいながら「使用状況」を探ってみると、ウーンなるほど、これはお世辞にも大盛況とはいえそうもない。お子様方は皆さん創造的遊びに熱中しておいでなのかしら、と見渡しても必ずしもそんな気配なし。ヤレ—安心(?)と滑り台に目を戻してみると、やってるやってる。結構いろんな滑り方、それぞれどこか使い方をしています。

お尻で滑り降りる基本型のほかに、あおむけに寝て、腹ばいの姿勢で、また、縁から手を離したまま、あるいは目をつむって、等々のバリエーションが続々と観察できます。同じ下降運動の中にも駆け降りるという方法もあり、これとは逆の駆け登りあり、はい上がりあり、ロープを使つてのロック・クライミングあり。こうなつてくると、いったい誰なんだ、「滑り」台などというケチな名前をつけたのは、といたくなる始末。一方的に決めつけた上、登っちゃいけない、と金切り声を上げることのアサハカ

サ。あるいはまた、彼らの止まるところを知らない進取的特性にただただ圧倒され、子どもは遊びの天才である、などとのたもうておられるオットリさ加減。

自分たち大人と違う子どもという存在を知り尽すことのむずかしさが、ここにはし無くも露呈した、というべきでしょう。それにしても、このことに気づいてか気づかずに、この遊具は社会性を伸ばします、これは運動能力を、こちらは創造性を、と「断定」できる人びとの自信と尊大さ。あいた口がふさがらない、などとアキレ返るのを返上して、こちらもガメツクそのリストに一項つけ加えてもらうことにします。

それは、「めくるめく経験」です。このタクラミがロジエ・カイヨワの説に刺激されていることは明らか。さすがカイヨワ先生、というべきでしょうが、一銭の得にもなりそうにない、当節流行の創造性ともほとんど無縁と思われるこの種の遊びをキチンと位置づけています。平常の秩序が崩され混乱されることよって生じる、「めくるめく経験」など、世間の荒波をたくましく乗り越えていくのに何の役にも立たん、と切って切り捨ててはしくないいのです。長い一生、何がどう転ぶか、わたしたちは知り尽してはいけません。そしてこの「めくるめく経験」、どういふわけか固定遊具が得意とするところでもあるのです。

4 遊び場を？

大人の知ったかぶりとおセツカイの「結晶」が今日の児童遊園だ、といったら悪口が過ぎるでしょうか。「あそびません こわいくるまの とおるみち」というポスターをはりめぐらすのに懸命な大人に比べたら、子どもたちに遊び場を、と奔走する大人のほうがどれだけマトモなのか、これは明らか。このような努力に最大級の敬意を表するのにやぶさかではありません。それほどまでに今日の子どもたちは追いつめられているのです。なんとしても「子どもたちのスペース」を確保しなくては。今をのがしてはもう絶望的。

このような大人たちの「善意」が実を結んで、めでたく遊び場が誕生。よかった、バンザイ。手をとりあって、肩をたたきあってうれし涙にむせぶのは、どうしたわけか大人だけ。肝心の子どもたちは、初めのしばらくの間こそ物珍しさに寄ってくるものの、すぐ一人減り二人減り、やがてほとんど姿を見せなくなってしまう。来てるな、と胸トキメかせてよくよく見ると、それは親に「引率」された小さな子だけ。夕方になって自転車で乗りつけた大きなオニチャンたちが「ひと荒らし」する外は、閑古鳥が鳴くばかり。

こんなはずではなかったのに、と首をひねるのは一握りのマトモな大人だけ。その他大勢は落成式のあの日から無関心派に転向しており、「昔のエネルギー、今いずこ」。そして孤立感はやがて絶望感に変わり、最後に残るのが見るも無残な廃墟のみ。児童遊園変じて雑草園ならまだマンなうち、ひどいときにはゴミ捨て場、となり果ててしまいます。ほんとにこれはどうしたわけでしょう。人びとの「善意」の中にヨワサが潜んでいたせいで、と筆者は思わずにいられません。

弱さの第一点は、「完成品」を珍重する考え方の中に認められます。まずガラクタを取り除き、次にマツ平らに整地して、それからあれやこれやの遊具を持ち込み、すえつけ、きれいにペンキを塗りたてて、ハイ出来上がり。ところ狭しと並べられた遊具の量もさることながら、そのどれもが完成品。子どもたちがみずからの必要感を掘り起こし、欲する遊び場のイメージを描きあい、少しずつの努力を着実に積み上げて行き、力をあわせ汗を流す中で削りあげていく。そのような余地がまったくなし。子どもたちはまったくの「お客様」で、ありがたく遊ばせていただくよう初めから強要されているのです。

盛者必衰。完成品は壊れるのみ。子どもたちが「自分」をぶっつければぶっつけるほど、その傷みも激しい。大人はこれを見越

して、できるだけ壊れないもの、ガンジョウなもの求めまわ
る。それが子どもにとっては変化のなき、単調さと映り、またま
た魅力を失ってしまう。つまるところ大人には「不変性」への信
仰があり、子どもの望みと相いれないこの信仰は「安全重視」に
よって支えられています。安全重視といえは至極モットモなので
すが、現実には安全「過」重視ともいふべき状態。この第二の間
題点は、首尾一貫、徹底しているならそれなりにゴリッパともい
えるのに、遊具が故障しても知らん顔といった「気まぐれ」が随
所に見られ、ドウシヨウモナイ現状にあります。

5 大人って？

先日、ある連続講演会で「競演」することになった友人のひと
りが楽屋うらでツブヤいたのでした。子どもの遊び、子どもの遊
び、の大声を出さずに済むときは来ないものだろうか、と。ふと
もらしたこのことばの陰で、思慮深い彼が何をどこまで「いぬぐ
らしていたのか、精確には知る由もありません。ただそれは、筆
者が筆者なりに何事かを感じ、何事かを思うキッカケとなるのに
十分なツブヤキではありました。

筆者の中でいまだハッキリした形をとるに至っていない「モヤ
モヤ」に、性急かつ強引にレットルをはるなら、大人とは何か、

ともなるでしょうか。正直なところ、どんなレットルであれ、
それをはるという行為自体によって、モヤモヤが不当に矮小化さ
れ変質してしまう恐れをどこかで感じ、ためらっていたのです
が、今回の小論をしめくくるにあたってあえてやってみた次第で
す。

大人とは何か。やはりどうも正面きつては扱にくい。となる
とレットルのはり方がマズかったのかな。一つ、経験談から始め
ましょう。昨春秋、園児をもつお母さん方にたずねてみたので
す。この秋、ドングリを拾われましたか、と。半分以上、三分の
二ほど、拾ったとの答え。では、お子さんが側にいない（つまり
自分だけ、あるいは大人どうしの）場面で拾われた方は、とつづ
けると、今度は拳手がほんのチラホラ。別の機会に同じことをも
う一度試みたのですが、結果はおどろくほどよく似ていました。
さてさて、大人とはどのような存在なのでしょう。子どもと一
緒なら拾い上げるドングリに、自分たちだけなら見向きもしな
い。人間だれしも自分をとりまく周囲の条件に応じて、ふるまい
方を変えるもの。とはいうものの、手のひらを返したようなこの
違い、陰日向がひどいといわれて抗弁できるでしょうか。子ども
のタメを思えばこそ、忙しい生活の合い間をぬって、自然に親し
むチャンスを作ってやったのだ、などと本気で主張しきれるでし

ようか。いや、本気でそのように思いこんでおられる向きが意外に多いのかもしれない。どうもそんな気がします。

それはすなわち、自分は子どもと別ものだ、という「秘められた信念」とでも呼ぶべきものです。自分は子どもと同じでない。

ここまでではまぎれもなくその通り。問題はその先、違いをどのようなものにとらえるか、まさにこの点にあります。ここでのポイントは、それを非連続な本質においてとらえるか、それとも連続的な本質とともにとらえるか、の選択にかかっているといえそうです。端的にいえば、子どもの遊びを考えると、自分たち大人の遊びをどれだけ意識し、どのように位置づけているか、そして更にはどのように実践しているか、ということとです。それとこれとは異質のもの、と決めつける進歩的遊び論はこの辺で根本から洗い直しが必要なのではなからうか、とオボロゲながら思うのです。

(三重大学)

五月のうた

どういうわけか一番最初に頭に浮かぶのは小学校唱歌の「鯉のぼり」、

「いいらあーあのなあみいと」

と歌いながら、何の意味かちっともわからなかったし、二番の

「たちばあーなかおーる」

というのは宝塚のスターの名前かと思ったりした小学生の私だった。

でも、成長して幼稚園の先生という、あこがれの職業について

からは、五月になると、やはり幼稚園唱歌の「こいのぼり」や

「せいくらべ」の歌を子どもたちと一緒に歌った。

そしていつのまにか結婚して、子どもが小学校に入学して、P

TAのコーラス部というのに入って、五月の歌として教えていた

だいた歌は「おお、牧場はみどり」だった。

青春時代を戦争、戦争の中にごした私にとって、ふたたび青

春をとり戻したかのような、さわやかな歌に思えて、声をはり上

げて歌ったことも今はなつかしい。

(赤間峰子)